沼津市
明治史料館通信

1993. 10. 25（季刊 年4回発行）Vol. 9 No. 3　通巻第35号

明治期の沼津の小学校教員たち（佐野房麿氏提供）
佐野照房は旧幕臣で、沼津兵学校喇叭（ラッパ）方教授だったが、後に沼津の小学校教員になった。

シリーズ 沼津兵学校とその人材 32

地域の教育と沼津兵学校出身者

沼津兵学校とその出身者が果たした明治文化史上における役割は極めて大きい。しかし中央や全国的レベルでの役割の大きさとは別に、地域に与えた影響も見落とすことはできない。

多くが東京へ去った中で、廃藩後も沼津周辺や静岡県内にとどまりこの地域に足跡を残した兵学校出身者がいた。彼らの足跡は政治・経済・文化など各領域にわたるが、中でも明治初期の初等教育に果たした役割に注目したい。

明治五年（一八七二）に学制が施行されると各地に続々と公立小学校が設立される。その教員には従来の寺子屋の師匠以外に多くの士族が就任した。沼津兵学校の出身者には、沼津・静岡・韮山などの中学校の教員となる者も多かったが、小学校で教鞭をとった者も少なくない。一体どれだけの数の出身者がどれだけの小学校に就職したのかを示す統計はないが、各地に残された史料や文献などから断片的に事例を拾

い出すことはできる。

たとえば、兵学校第三期資業生千種顕信（房五郎）は明治十一年（一八七八）から十八年（一八八五）まで賀茂郡網代村（熱海市）の村立小学臼月舎で教えている。彼は開成所でフランス語を学んだ経歴をもっていた（大高吟之助『網代郷土史』一九七五年）。

また同じく第四期資業生だった関近義（勘五郎）は、那賀郡浜村（西伊豆町）の明倫館で明治九年（一八七六）に上京するまで教鞭をとった（『明治初期静岡県史料第四巻』）。なお、彼の息子は大正・昭和期に大阪市長をつとめた関一であり、一は明治六年に浜村で生まれている（関秀雄編『関一遺稿集・都市政策の理論と実際』一九三六年）。

同じく第四期資業生西村正立は富士郡松岡村（富士市）の岩松学舎の教員になったらしい（大平原家文書R—39）。彼は明治八年に上京した。

原篤信は明治三年から六年まで沼津兵学校で学んだというが、富士郡蓼原村（富士市）の三省舎の教員になった（『富士市史　下巻』一九六六年）。

明治七年（一八七四）二十歳で駿東郡獅子浜村（沼津市）の培達舎の教員に招聘された近藤克は、「沼津小学校及同所兵学寮ニ於テ明治一年二月ヨリ同五年五月迄都合五ヶ年四ヶ月漢学研究、沼津小学校ニ於テ明治一年二月ヨリ同二年八月迄都合壱ヶ年七ヶ月手跡研究、沼津小学校同所兵学寮及東京兵学寮ニ於テ明治一年ヨリ同六年九月迄都合六ヶ年八ヶ月洋算研究」と「学校開業願書」（大平原家文書R—9）に経歴が紹介されている。彼はその後も長く同地で教鞭をとったようで、郷土教育界の恩人として没後教え子たちによって墓碑が建てられた。その碑文は左の通りである。

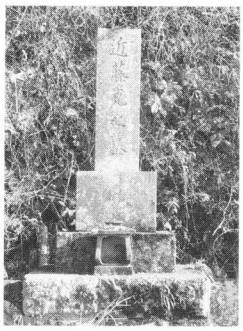
君本姓生駒氏号聴雨為叔母近藤氏所養因冒其姓為人簡潔好学嘗為静岡藩立沼津兵学校書生後入陸軍兵学寮□□羅脚疾帰郷里会際地方小学創立君所聘任公立小学共成舎教員転任静浦小学校訓導在職属籍薫陶児童十有八年脚疾再発乃辞職家居尚教育少壮有年是誠可謂尽力教育矣明治三十一年九月二日病死謚日道学居士

明治四十三年九月二日十三回忌之辰建立之追善供養

門弟一同

沼津兵学校附属小学校の分校であった駿東郡東沢田村（沼津市）の沢田学校所の出身者も地方教育界で活躍した。旧幕臣天野鈔太郎は明治八年十六歳の時、東椎路村（沼津市）の勝明舎の教員になったが、その履歴には「明治元年五月四日旧幕府臣田中対谷ニ従ヒ手跡教授ヲ受同二年敬身舎ニ於テ漢書及算術ヲ受ケ同六年集成舎ニ於テ同漢書算術教授ヲ受ケ八ヶ年ノ間研究」（西椎路区有文書R—2）とあり、沢田学校所＝敬身舎の出身者だったことがわかる。

駿東郡東熊堂村の僧侶で富士郡下條村（富士宮市）の芙蓉館や東沢田村の敬身舎で教員をつとめた十八公慶遅も、明治三年から六年にかけて沢田学校所で浅田耕蔵に漢学を、野口昇次郎に洋算を学んだ経歴の持ち主だった。兵学校が育成した教員が士族のみならず平民にも及んだ一例である。



近藤克の墓
（獅子浜区墓地）

他にも地域に足跡を残した兵学校出身の教員は多い（樋口雄彦「地域史上の沼津兵学校」『沼津市博物館紀要10』一九八六年）。

特に沼津兵学校出身者は洋算に長じていたため新時代の教科担当としてふさわしい存在であった。兵学校出身者に対する需要は静岡県のみにとどまらなかった。群馬県における小学校の教員養成機関（小学教員伝習所・暢発学校・群馬県師範学校）においては、野口保三・滝野寿茂・大平俊章・愛知信元・志村貞鋺・佐藤義勇・木部決・杉山義利・加藤義質ら多くの沼津兵学校出身者が洋算教育を指導した事実が知られる（大竹茂雄「群馬における明治時代初期の数学教師」『群馬文化』第212号、一九八七年、宮地正人「廃藩置県後の静岡県士族の動向」『静岡県近代史研究』第16号、一九九〇年）。

江原素六とその周辺〈20〉

杉浦清介「苟生日記」にみる江原素六

江原素六の生いたちや維新期までの経歴や行動については、彼が後年になって書いた回想録やそれらを基にして叙述された伝記を参考にするしかない。

しかし、ここに紹介する史料は戊辰戦争期の江原の動向を客観的に伺うことができる数少ない一次史料である。旧幕臣杉浦清（清介・号赤城）が慶応四年（一八六八）正月から明治二年（一八六九）四月まで記した「苟生日記」（橋本博編『改訂維新日誌　第六巻』所収）がそれである。

杉浦は開成所書物御用出役・外国奉行支配定役・御徒目付・砲兵差図役並勤方などを歴任した人物で、慶応四年当時四十三歳。この日記は鳥羽・伏見の敗戦で大坂から江戸へ引きあげ、その後榎本武揚の脱走軍に参加、箱館戦争の際中までの記録である。彼は降伏後静岡藩に帰属し沼津兵学校三等教授並になった。

まず江原がこの日記に登場するのは「序」の中である。「十二月十二日、大君俄ニ浪華ニ下リ給ヒ、上下心ヲ安ンゼザル模様トハ成レリ、同月廿日安藤鏐太郎、大久保権右衛門、河野信次郎、江原鋳三郎、遐然余カ土佐堀一丁目ノ寓居ヲ来過シ、再度砲局ニ入ルコトヲス、ム」とある。慶応三年十月大政奉還、十二月には右にある通り徳川慶喜は京都から大坂城に入った。江原は十二月に砲兵差図役並に昇進したばかりだが、やはり京都から大坂に移っていた。大坂で江原は杉浦を訪問し、砲兵局にもどることを勧めた。杉浦は当時大坂町奉行支配小十人格調役並だったが、この勧めに従い砲兵差図役頭取勤方に転任した。

次に江原の名前が登場するのは新政府軍と旧幕府軍が鳥羽・伏見で交戦を開始した慶応四年正月三日の項である。大坂滞陣中の旧幕府方では、戦争状態の中で敵の攪乱工作が行われることを憂慮し、大坂市中の薩摩藩蔵屋敷い兵隊を派遣し占拠すべきであるとの議論が起きていたが、杉浦はその可能性が少ないことを主張し穏便に処置することを主張した。ところが開戦の情報が伝わるやいきり立つ将兵によって蔵屋敷の焼打ちが行われたのみならず兵隊による「市中横行」（略奪・暴行のことか）が起きてしまった。その責任者である砲兵将校たちにまったく反省の色がないことに対し、杉浦は「実ニ悪ムベキ所為少カラス」と記している。そしてその続きには「此時江原鋳三郎モ甚タ前件ヲ歎息セリ」と記されており、この記述から江原は杉浦同様冷静な対応をすべきであるという考えの持ち主であったことが伺える。江原は当時二十六歳であるが、戦争の混乱に興奮したり無闇に強硬論をとったりしない老成した青年だったのではないだろうか。

三つ目の記述は慶応四年閏四月十二日の以下のものである。「十二日、天晴、微恙、家ニ在リ、前田鏘太郎来り、江原鋳三郎之凶問ヲ報ス、吾之カ為ニ慟セリ、且砲兵局甲比丹以上無耻之話アリ、吾之ヲ聞テ、胸中悪ヲ為ス者数日」。

杉浦も江原も江戸へもどっていたが、官軍が江戸へ進撃、四月十一日には江戸城無血開城が行われ、前後して抗戦派旧幕臣の脱走が続き、関東各地で戦闘が継続していた。江原も部下に殉じて撤兵隊の脱走軍に身を投じ、閏四月三日には市川・船橋付近で官軍と戦闘を行った。

「江原鋳三郎之凶問」というのは、江原がこの戦闘で負傷したという事実を言うのであろう。杉浦はこの報に接しひどく悲しんだというから、二人はかなり親しい間柄だったかと思われる。

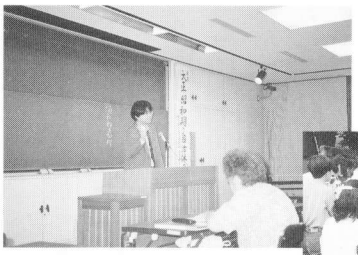
さて、杉浦は後年この日記（あるいは別の日記か）を「日本新聞」（『日本』のことか）に連載したというが、江原はそれを見て当時杉浦が自分のことを高く評価してくれていたことを知ったようである（江原素六述『急がば廻れ』一九一八年、なお同書では杉浦静海となっているが、「清介」のことであろう）。

お知らせ欄

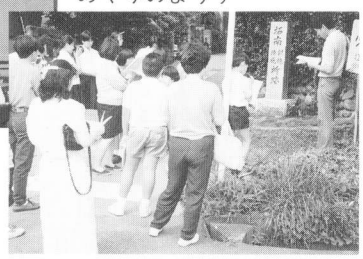
◎企画展「沼津市のなりたち―自治と行政の発達史―」の終了ほか

七月一日から開催していました企画展「沼津市のなりたち―自治と行政の発達史―」は、九月二十九日で終了しました。

展示を見逃した方には、企画展解説書『沼津市のなりたち―自治と行政の発達史―』（52頁、カラー8頁、一一〇〇円）がありますのでお求めいただければと思います。



歴史講座のようす



平和を考える親子戦争史跡めぐりのようす

また、企画展テーマに合わせた歴史講座は九月に四回連続で行いましたが、熱心な聴講者に集っていただくことができました。

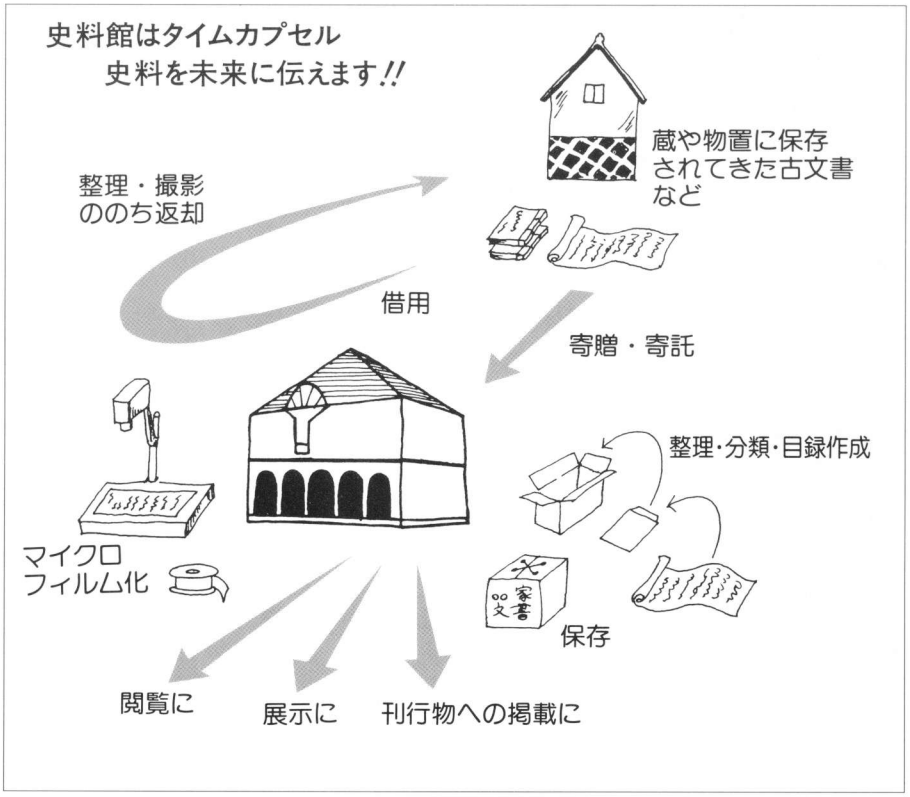
八月五日に開催した「平和を考える親子戦争史跡めぐり」には、小学一年生から中学三年生までの児童・生徒十七名とその保護者九名の計二十六名が参加しました。雨が多かった今年の夏ですが、当日は天候にも恵まれ、参加者も地元に残された戦争の痕跡を熱心に観察していました。

◎史料の提供についてお願い

当館では沼津市の歴史に関する資料を広く収集しています。展示会を開いたり、講座を開催したり、本を刊行したりといった事業（史料の「公開」）は、資料があることによってはじめて成り立ちます。

また、社会の急激な変化によって失われつつある歴史資料を「保存」すること自体、当館の重要な任務であると考えます。

家を新築したり、蔵をこわしたりする際、何か古い資料（文書・書籍・物品・写真など）が出てきましたら是非御一報いただきますようお願い致します。当館で責任をもって整理し、保存・活用への措置をとらせていただきます。



沼津市明治史料館通信　第35号
編集・発行　沼津市明治史料館
〒410 沼津市西熊堂三七二―一
電話 〇五五九―二三―三三三五
FAX 〇五五九―二五―三〇一八